

子宮頸がんを防ぐための第一選択として ワクチンを挙げるのが問題なのである。

そんな方法しか思い浮かばないのか？

- ・子宮頸がんの原因の一つがHPV(ヒトパピローマウイルス; human papillomavirus)の16型や18型の感染であると言うのは間違いではないが、それはあくまで“小さな原因の一つ、”でしかない。
- ・一般的に、8割の人が生涯に一度はHPVに感染していると言われている。がんにかかっていない正常な女性を検査すると、10代では30~40%にHPVが検出され、20代では20~30%、30代では10~20%、40代では5~10%に検出されるほど、HPVはどこにでもいるウイルスである。
- ・HPVに感染しても、大部分は自覚症状が無いまま、1年以内に7割の人でHPVの消失、2年以内に9割の人でHPVの消失が確認できる。
- ・その後も持続感染となった場合、やがて、前がん病変と呼ばれる粘膜組織の変化が見られるが、最も軽度のCIN1から次の段階のCIN2に進行した場合でも、その1年後には38%、2年後には63%が自然軽快する。
- ・次の段階のCIN3まで進む確率は低く、HPV感染から最終的にがん化に至るまでには平均的には20年かかるとされている。
- ・結局、HPV感染の結果として子宮頸がんにかかるとする確率は0.15%に過ぎない。
- ・HPVは、皮膚や粘膜の微小な傷から侵入し、扁平上皮基底細胞に感染するが、感染した細胞を破壊することもなく、ウイルス粒子を大量に放出させることもない。そのため、抗原提示細胞の活性化や抗原認識の過程を経ないため、免疫が誘導されにくい。
- ・また、多めに増殖したとしても組織内にとどまり、血中には出て行かない。そのため、抗体が作られにくく、粘膜表面からのHPVの侵入を防ぐことは難しい。そのため、何度でもHPVに感染してしまうことがある。
- ・裏を返せば、筋肉内に投与するという一般的な投与経路にて接種する子宮頸がんワクチンに効果があったとしても、それは限定的なものとなる。

HPVに感染しても、99.85%の人は子宮頸がんにかからない。残りの0.15%の人はHPVの犠牲になると捉えることも出来るが、この数値を見て、子宮頸がんの原因がHPV感染だと言えるのか？ では、なぜ99.85%の人が大丈夫なのか？



その99.85%の人がやっている事こそが、子宮頸がん予防法なのではないのか？

人々の“健康を願って、子宮頸がんワクチンを推奨するというのなら、なぜ犠牲者を無視するような方針を採る？ 彼女らが少数派だから？
そもそも、健康の為にリスクを伴う対策を採ってはならない。健康のために採るべき対策は、HPVに感染されても直ぐに排除できる体を作ることである。

